

京都部落問題 研究資料センター通信

第56号

発行日 2019年7月25日（年4回発行） 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

2019年度 差別の歴史を考える連続講座Ⅱ

第1回 近世石清水八幡宮の菖蒲革と神人の活動

10月4日（金）

講師：竹中 友里代さん（京都府立大学）

要旨：武具に好まれる菖蒲革は将軍家への献上品で、職掌の神宝所神人や職人等の営みを史料より明らかにする。

第2回 賤民廃止令について横山百合子氏の疑問に答える

10月11日（金）

講師：上杉 聰さん（大阪市立大学元教授）

要旨：横山氏が『江戸東京の明治維新』などで描いた、賤民廃止令の成立を江戸における近世的政策の延長、帰結とする見地を取り上げて検討する。

第3回 江戸時代の清水寺に存在した「仁王門下の惣門」と門番

—『成就院日記』を中心に—

10月25日（金）

講師：吉住 恭子さん（京都市歴史資料館館員）

要旨：清水寺に現存する江戸時代の日記『成就院日記』。そこに頻出し、「惣門」とも称された今は存在しない門について紹介する。

第4回 日本国憲法制定期の新聞論説（1945～1947年）

11月1日（金）

講師：梶居 佳広さん（立命館大学システム研究所客員研究員）

要旨：改定の是非が議論される日本国憲法であるが、制定時はどうであったか？当時の新聞論説を手掛かりに検討する。その際、京都の新聞にも注目したい。

* * * * *

時 間：午後6時30分～午後8時30分

場 所：京都府部落解放センター会議室 参加費：無料

～参加ご希望の方は前日までに電話・FAX・電子メールでご連絡ください～

横井清さんが遺されたもの

川嶋将生

(立命館大学名誉教授)

二〇一九年四月七日、日本中世の民衆史研究・被差別民史研究に大きな足跡を遺された横井清さんが、病のため八三歳の生涯を終えられた。その報に接したとき、三ヶ月ほど前までEメールでやりとりしていただけに、俄には信じがたかった。長年、いろいろ教えをうけてきただけに誠に痛惜の極みであり、心よりご冥福をお祈りしたい。以下に記す文章は、私なりの横井さんへの追悼である。

私が学部三回生時、当時、どんなかの先生の研究室で辞典編集の仕事をしていた横井さんのところへ、「放賤従良」について質問するため伺いました。事前の勉強が不足していたため、横井さんからの質問に十分答えられず、結果「もう少し勉強してくるよう」とお叱りをうけて、尻尾をまいてその場を逃げ出したのが、私にとつて横井さんとの最初の出会いであった。以来、横井さんにはさまざまな場面で教えをうけてきたが、横井さんは人に対しての気遣いが実に細やかで、

それが横井さんの研究にもよく表れていて、史料のなかに潜む民衆の内面までも照射した分析を行い、また論文を一読すればすぐに察せられるように、研究対象とは厳しく、深く対峙されていた。

そうした「人間横井清」がもつともよく表れているのが、『「私」の証明―花の園にて―』や『花橋をうめてこそ―京・隠喩息づく都―』に収められた数々の文章だと私には思われるが、それを紹介する余裕はいまはない。

横井さんの、論文をはじめとする著作の文章は、いわゆる論文調ではなく、分かりやすい非常な名文として知られているが、それは「てにをはさえ合わない学術論文も横行してはばからない現実に直面」^{※2}して、誰にも解りやすい文章を常に心がけていたからであろう。そうした横井さんの幾つかの論文が、最初の論文集『中世民衆の生活文化』の書名のもと、一九七五年四月、東京大学出版会から刊行されることになったのも、その内

容は勿論のことながら、当時の編集者渡邊勲さんが、横井さんの「文体」が専門家のそれらしくならず平易であると感じ、そこが渡邊さんの琴線に触れたことも、一つの要因であったらしい。

その後の中世民衆史研究に大きな影響を与えることになったこの著書で、横井さんが主張したかったことは、「彼ら民衆の『内面』」にも、しっかりと、丁寧に、光を当てることにより、民衆史の実際面を見直そう。その際、民衆同士の間にも、差別／被差別の問題は存在したことを軽視も無視もせず、直視して行くことが必要だと考えることだったと、自らが纏められている。鈴木良一さんの『応仁の乱』(岩波新書、一九七三)への書評のなかで、「ひる強盗」を行っていた足軽たちを、「人民の敵であった」と鈴木さんが規定されたのに対し、横井さんは彼らもまた「人民である」と見る」と批判されたのも、右の主張と同一線上にあり、これこそ、終生変わらぬ横井さんの研究視点であったように私には思われる。

一九三五年一〇月生まれの横井さんは、一九六二年、立命館大学大学院修士課程を修了された後、部落問題研究所の研究者として、

『部落史に関する総合的研究』(全四巻)の編集に従事、さらに後、京都市史編さん所で『京都の歴史』の三・四巻の編さんに関わられ、一九七〇年四月、花園大学の専任教員に転じられた。その後、富山大学教授・桃山学院大学教授を歴任されるとともに、当京都部落問題研究資料センターとの関係であれば、前身京都部落史研究所が一九七七年に設立された時、企画委員として参画された。

こうした経歴をもつ横井さんが、最初に公にした論文は、「荘園体制下の分業形態と手工業」(『日本史研究』六二号)で、一九六二年九月のことであった。同年一二月には、その後の当該分野研究に大きな影響を及ぼし、現在もお引用されることの多い「日本中世における卑賤観の展開とその条件―一つの試論的展望―」を『部落問題研究』一二号に発表した。^{※3}このようにみると、一九六二年は横井さんのその後の研究生活にとつて、大きなターニングポイントになった年であったのではなからうか。

以後、最後に列挙した単著にみるように、次々と研究成果をまとめられ、その範囲は、冒頭に記した分野のほか、軍記物語に関する研究から、『看聞日記』の筆者伏

見宮貞成親王といった皇族の生涯を追究するもの、さらには茶書などの校訂にまで及んだが、研究対象と向き合う横井さんの姿勢は、先に記したように一貫して変わるところはなかった。

最後となった論文集『中世日本文化史論考』に収められた諸論考のなかでも、とりわけ『平家物語』の成立に関する論文は、発表当時（一九七四年）から日本文学研究界でも大きな反響を呼び、貞成の追究は、師の林屋先生をして、「日記を扱うのに、あんなふうによつたとほな」と言わしめるほどの斬新なもので、一五世紀足利義教期を中心とした政治・文化を語るうえで、現在もお必読文献となっている。ただ貞成に関していえば、横井さんは『看聞日記』を『看聞御記』と記したことを後に自己批判し、改題して講談社学術文庫に収めた。この自己批判文を公にしたのも、いかにも横井さんの研究に対する誠実さを表すものであった、と私は思う。

たり、人前で語ったりする作業は断ち、努めて自問自答を胸中に、大事に、畳み込んで行くこととした^{※1}と、一線を画すことを公にされた。その理由について横井さんは「かねてより感ずるところあつて」としか語っていない。深い思慮の結果を、このような短い言葉で表現された横井さんの心の奥底に、余人が無造作に分け入ろうとするのは厳に慎まねばならないし、まして軽率な推測は許されないだろう。ただその後出版された書物には、たしかにそうした分野の文章はみられない。

以上、再説は避けるが、中世民衆史研究、中世文化史研究に遺された横井さんの仕事は大きく、それを私たち後進のものほどのように受け継ぐかは、よほど腹をくくって考えなければならぬだろう。しかし横井さんの仕事を批判的に継承することこそ、横井さん自身もつとも望まれていたことだ、と私は考える。ただしそれは、その道を歩む個々が、己との対話のなかで、しかと、受け止めるべき問題である。なお横井さんの享年は、奇しくも師の林屋辰三郎先生と同年であった。

最後に横井さんが刊行された単著のみを、刊行順に列記しておく。

『日本の名著15 新井白石』（中央公論社、一九六九。のち講談社学術文庫『新井白石「読史余論」』）
 『中世民衆の生活文化』（東京大学出版会、一九七五。のち講談社学術文庫）
 『「私」の証明―花の園にて―』（私家版、桃天文庫、一九七七）
 『東山文化―その背景と基層―』（教育社歴史新書、一九七九。のち平凡社ライブラリー）
 『看聞御記―「王者」と「衆庶」のはざまにて―』（そしえて、一九七九。のち講談社学術文庫『室町時代の―皇族の生涯―『看聞日記』の世界―』）
 『下剋上の文化』（東京大学出版会、一九八〇）
 『現代に生きる中世』（西田書店、一九八二）
 『中世を生きた人びと』（ミネルヴァ書房、一九八一。のち改編して『史話中世を生きた人びと』福武書店、一九九一）
 『的と袍衣―中世人の生と死―』（平凡社、一九八八。のち平凡社ライブラリー）
 『光あるうちに―中世文化と部落問題を追って―』（阿吽社、一九九〇）
 『花橋をうろててこそ―京・隠喩息づく都―』（三省堂、一九九三）
 『中世日本文化史論考』（平凡社、二〇〇一）

注

- * 1 横井さんの研究の特色については、赤坂憲雄さんが「横井史学の魅力」と題した一文を書いておられる（『史話中世を生きた人びと』所収）。そこで語られている内容については、私はまったく同感であり、なんの異存もない。是非、参照していただきたい。
- * 2 横井清『「私」の証明―花の園にて―』（私家版、桃天文庫、一九七七）六九頁。
- * 3 横井清「思えば、あれが旅の始まりだった」（渡邊勲編集『三十七人の著者 自著を語る』（知泉書館、二〇一八））。
- * 4 注3論文。
- * 5 横井清「鈴木良一著『応仁の乱』にみる「人民」「よけいもの」観についての感想」（『中世民衆の生活文化』所収）。
- * 6 本論文を書くにあたっては、永島福太郎・奈良本辰也両先生からの重大な示唆があったことを、横井さん自らが吐露されている（『部落問題研究』七八号、「シンポジウム 中世身分制の研究状況と課題」七七頁、一九八四）。
- * 7 横井清『室町時代の―皇族の生涯―』学術文庫版の刊行に当たって。
- * 8 横井清『光あるうちに』所収「『看聞日記』と『看聞御記』の間」。
- * 9 同書所収「中世文化と部落問題を追って」。

本の紹介

『大学による盗骨
研究利用され続ける琉球人・アイヌ人遺骨』

(松島泰勝・木村朗編著、耕文社、二〇一九年)

板垣竜太

(同志社大学)

一 遺骨返還運動の現場から

二〇一八年二月四日、琉球民族の五名が京都大学に対し琉球民族遺骨の返還等を求めて京都地方裁判所に提訴した。戦前に京都帝国大学の人類学者が、沖縄県今帰仁村の百按司墓に葬られた遺骨を研究の「資料」として持ち出した。その遺骨は今もなお京都大学の総合博物館の収蔵室に「プラスチック製の直方体の箱」に入れて眠っている(本書第一章)。原告の一人である衆議院議員照屋寛徳が、国政調査権を用いて文部科学省経由で照会請求した事項への回答より)。原告のうち二人(亀谷正子、玉城毅。亀谷は第一章の執筆)は琉球王国の最初の王家である第一尚氏の子孫であり、百按司墓の祭祀承継者である。あとの三人(照屋寛徳、金城実、松島泰勝)は祭祀承継者では

ないが、この裁判自体が「植民地主義に対する歴史の清算を問う」もので琉球民族の「自己決定権の行使」として行われていることから名を連ねたものである(「訴状要旨陳述書」より。また弁護団の一人である丹羽雅雄による第一章も参照)。誰も好きこのんで訴訟にもちこんだのではない。現に、ほとんどが遠方に住む原告らが京都地裁まで足を運ぶのも容易なことではない(京大教職員にとっては通勤圏内だ)。にもかかわらず原告が提訴にいたったのは、京大がこの問題に後ろ向きな対応をとり続けているからである。それどころか、松島泰勝が二〇一七年に京都大学の総合博物館、理学部、法人当局などに質問や要望を投げかけても、正面からの回答を回避するのみならず、「本件で本学を来訪すること

はご遠慮いただき」と門前払いでしてきた。戦前の帝国大学と変わらぬ非対称的な関係性がそこにあった。そこで原告たちは、先行していたアイヌの遺骨返還運動に学びながら、京大を提訴することになったのである(第一章)。

本書はまさにこうした遺骨返還運動とその連帯の現場から編まれた書籍である。編者の松島泰勝が「おわりに」で端的に述べているように、「本書の最大の特徴は、アイヌ民族と琉球民族が直面している窃骨問題という植民地主義問題と、遺骨返還運動という脱植民地化運動を相互に有機的に関連させながら論じているところにある。」なぜ、旧帝国大学に大日本帝国下の諸民族の遺骨が集められることになったのか。いかにして返還運動が立ち上がり、どのような成果をあげ、どのような課題が残されているのか。今日の大学は植民地主義的な関係性から抜け出すことが可能なのか。本書は、こうした諸問題に答える(応えさせる)べく、まさに一線で活動する著者たちが寄せた論考から成っている。

二六名の筆者による一七本の論考と一〇篇のコラムから構成される本書を満遍なく紹介することは困難である。ここでは本書で論じられる数々の重要なポイントのうち、第一〜十六章で述べられていることのほんの一部をピックアップし、私なりの観点からストーリーをまとめなおすことをもって「本の紹介」としたい。

二 遺骨はいかにして研究資料となったか

文化・社会・言語・宗教・伝承・意識などから人間を研究するのはなく、骨をはじめとする身体的な部位を分析する人類学の研究分野を形質人類学という(体質人類学ともいい、より広く自然人類学ともいう)。特に、有機体としてのヒトの体の部位を体系的に測定、分析することで「人種」なるものを自然科学的に説明しようとする研究領域を、かつて人種学(Rassenkunde)といった。

その学問分野の本場はドイツ(厳密にいえばドイツ語圏)であった。小田博志(第六章)が紹介しているように、ベルリン大の著名な病理学者にして人類学者のフィルヒョウは、アイヌの遺骨を計測した論文を、いち早く一八八〇年に発

表した。その骨はドイツ人旅行家シュレージンガーによりアイヌのコタンの墓地から夜中に盗み出されたものだったことが当時包み隠さず明かされていたが、フィルヒョウは論文のなかで「彼（シュレージンガー）」に続く人たちが早く現れてほしい」と収集を呼びかけた。

近代日本の人類学的人骨研究もこのオリエンタリズムとレイシズムが否応なく織り込まれた西洋の学問的磁場のなかではじまった。植木哲也（第四章）が論ずるように、日本人としてはじめて一八八八年と一八八九年にアイヌの頭骨を大量収集した（東京）帝国大学の小金井良精は、ドイツで解剖学を学んだ人物で、留学時にフィルヒョウらとも交流があった。佐藤幸男（第八章）が論ずるように、「輸入ヨーロッパ中心主義の人種主義と迎合的に癒着した「日本のオリエンタリズム」を内面化した人種論」として、人骨の収集と研究がはじまったのである。

そこには、西洋の学知によってまなざされる「日本人」と、大日本国内の諸集団をまなざす「日本人」との二重性が存在していた。日本人研究者がアイヌ民族や琉球

民族の遺骨を集めたのも、日本人とはどのようなルーツと特徴をもった「人種」なのかを説明するための手段であり、さらにいえば富山一郎（第三章）が指摘するように、「そこには、どこまでが日本人なのかという問いが、一貫して想定されて」いた。

京都帝国大学はその一大研究拠点であった。特に戦前期に、医学部の病理学教室と解剖学教室で人類学が活発に展開された。岡本晃明（第七章）がまとめているように、病理学教室にはフライブルクで学んだ清野謙次がいた。清野は日本列島の先住民がアイヌだという説を批判し、日本石器時代人と呼ぶべきものこそが原住民であり、そこから混血などを経て日本人とアイヌが分化したという学説を提起した。その学説を立証するため、清野は大日本帝国支配下の北海道や樺太から遺骨をかき集めた。九州以北の収集を一通り終えたのちに清野研究室が向かったのは南だった。大津幸夫（第一章）が言うように、清野の担当講座で講師をしていた三宅宗悦が奄美・琉球の収集調査を展開し、清野学説の「南島」版の構築を進め

た。こうして集められた「清野コレクション」は一四〇〇例に達した。

本書の各所に登場する金関丈夫は解剖学教室で、師匠の足立文太郎の勧めにより人類学の道に進み、清野からそのエッセンスを吸収した。金関は一九二九年に琉球（沖縄）

に人骨調査に行った。彼はその経験を連載随筆「琉球への旅」で細かに公にしていたため、その収集の実態が生々しく分かる。宮城隆尋（第一章）は次のように指摘する。金関の随筆には県・市・警察

など権力機構の許可を得たことは記されている一方、遺族や門中の同意を受けたとの記述は一切ない。金関は多くの墓を「無縁」と考えていたようだが、百按司墓はさまざまな門中が「今帰仁上り」の目的地の一つとしてきたし、風葬墓が血縁関係をこえて利用されてきた慣習もある。刑法が定める墳墓の発掘の禁止に抵触しないためには、そこが祭祀礼拝の対象となっていないという条件が不可欠である。だが、金関が収集した当時の『琉球新報』には、「引取人があれば、何時でも京都から「御返り遊ばす」様な仕掛」になっている

との記事がある。このことは、金関が遺骨を収集した墓が本当に「無縁」であったかどうか、彼自身も確証を得られていなかったことを示唆するものである。金関の人骨収集が権力機構や有力者をこえて協力を得られなかったことについては、松島泰勝（第二章）も論じている。「人夫はこわがって手伝ってくれない」、「しかたがないのであとひとりで集める」などと金関が述懐するように、忌避する住民を尻目に彼は黙々と作業を続けたのである。

こうした本書の記述は、本州と九州での人類学者の収集の仕方と対照すると、植民地主義的としかいいようのない関係性が一層明確に浮かび上がる。清野謙次が『日本原人の研究』や『古代人骨の研究』に基づく『日本人種論』で明記しているように、本州と九州の調査の中心対象は貝塚であった。そこから出てきた骨は「日本石器時代人骨」との範疇でくくられた。この場合、出土場所は明らかに既に祭祀の対象ではなかったし、発掘も畑などの地主の了承を得て積極的に進められた。一方、古墳・横穴に葬られているもの場合は、

「地方人士の迷信もあり、之を取らざる法令もある」ので積極的には収集できず、ただ偶然出てくるのを待つしかないとの消極的方針をとっていた。これは「日本古墳横穴人骨」として別類型とされた。ところがアイヌ、琉球（沖縄）、奄美などの遺骨はこれらとはさらに別枠で「日本特殊地方人骨」と分類された。そこでは、「古墳横穴」と同じように信仰の対象であり、同じように取り締まる法令があっても、偶然をまたず積極的に収集が進められた。年代推定も不明の場合が多く、近世・近代のものも相当含まれており、とうてい「古人骨」などと一括できるものではなかった。この「日本特殊地方」に対する取り扱い方針の違いを見るにつけ、植民地主義的ダブルスタンダードとでもいうべき研究態度があったと言わざるを得ない。

三 「人骨」が「遺骨」として帰るために

日本は、アジア太平洋戦争の敗戦とともに朝鮮や台湾などの植民地を公式的に失った。しかし、そのことは自動的に日本の植民地主

義が払拭されることにはつながらなかった。ここに領土としての「植民地」とは概念上区別される関係性としての「植民地主義」の問題がある。本書を貫くキーワードの一つとして植民地主義が設定されているのは、それが戦前の植民地支配に由来するものであるとともに、今日にも引き継がれていることを批判的に捉えるためである。植民地主義の力によって墓から持ち去られた遺骨を再び故郷に返すことは、編者の木村朗（第一章）が述べるように、今日の脱植民地化の重要な課題の一つとなっている。川瀬俊治（第二章）がこれを朝鮮人強制連行被害者の遺骨返還問題につなげて論じているように、墓から研究室に持ち去られた遺骨の問題と、生きたまま生活の場から引き離され異国の地で命を失い郷里に帰れずにいる遺骨の問題は、植民地主義の歴史のなかでつながっている。

植民地主義の問題には、当然、近代主権国家によって諸権利を蹂躪された先住民族問題を含む。もつとえば遺骨返還運動においては先住民族の方が先行してきた。世界的に見れば、旧植民地への返還

の動きに先んじて、米国の先住民族への遺骨返還が進んだ。前田朗（第九章）が整理しているように、一九八九年にアメリカ・インディアン博物館法が成立して以来、 Smithsonian 博物館は五千以上の遺骨を返してきた。

日本でも大学保有の人骨に対する問題提起はアイヌ民族が先行した。植木哲也（第四章）および出原昌志（第五章）が述べるように、一九八〇年に海馬沢博が北海道大学に問い合わせたことを嚆矢とし、その後北海道ウタリ協会の返還運動が展開された。大きな政策的転換点は日本の政府や大学の内在的な取り組みによってではなく、二〇〇七年の「先住民族の権利に関する国連宣言」によってもたらされた。同宣言を契機に、日本政府はアイヌをようやく「先住民族」と認め、アイヌ政策の見直しを進めた。この国連宣言には「人間の遺骨等 (human remains) の返還に

対する権利」が明記されている（第一二条）。これにも呼応しつつ、日本政府は二〇一四年にアイヌに関する「民族共生の象徴となる空間」の整備方針を発表し、その空間に「全国各地の大学において保管されていく」遺骨や副葬品を「関係者の理解及び協力の下で」集約する方向性を打ち出した。と同時に、個人と祭祀承継者が特定された遺骨に限って返還するガイドラインも公表した。しかし、遺骨の個人特定というハードルが異様に高いのみならず、祭祀承継者という概念自体がアイヌの祭祀文化の実態を無視したものであり、むしろ問題は複雑化することになった。

それでもアイヌ遺骨については、曲がりなりにも国連宣言や法令などにもとづき進められているのに対し、それ以外の地域・民族の遺骨に対する日本の大学・博物館の対応は冷淡極まりない。琉球民族遺骨についてはいえば、新たな動きが起こったのは日本ではなく台湾においてである。一九三四年に京都帝大を離れた金関丈夫は、新たな赴任先の台北帝大で人類学的人骨研究の拠点を構築した（戦後は九州大学で就職し、そこでも拠点を築いた。台湾への赴任に際し金関が持つて行った収集人骨は、戦後、国立台湾大学へと受け継がれた。そうして台北に残された琉球人遺骨について、編者の一人松島泰勝は中華琉球研究学会との連携のもと、

国立台湾大学に返還要求を提起した。本書でも紹介されているように、国立台湾大学は早くも二〇一七年には沖繩への返還方針を固めた。折しも台湾では、金関やその弟子らが集めた先住少数民族の遺骨に対する返還運動が展開されており、それと共振した動きだった。そして本書刊行後の二〇一九年三月、琉球遺骨六三体が国立台湾大学から沖繩県立埋蔵文化財センターに返還された。ただし、北海道の「象徴空間」と同様に、遺骨は故郷に帰ったわけではない。

さらに厄介なことに、人類学的人骨研究は単に過去の学問ではない。一九〇二〇世紀において計測の対象となった人骨は、二一世紀に入りDNA分析という新たな科学のまなざしのもとに置かれることになった(松島の第二章、植木の第四章で論じられている)。各地の骨からヒトDNAを抽出し、複雑な統計分析によって「日本人のルーツ」などを復元しようとする研究が活発化している。富山一郎(第三章)が「研究のおぞましき」と語るのは、単にかつての学問がひどかったということではなく、学問のために人骨を収集利用しながら論文

数や研究資金獲得を誇る金関丈夫の「自然」な語り口に、現在の学問状況を重ね合わせているからである。

このように本書は、特定の研究分野をこえて、今日の学問のあり方そのものを問うている。私の中には、現在、大学間および個人間が競い合い、研究者が個人化され「忙しい」が口癖のようになっていく状況で、多くの研究者がこの遺骨返還をめぐる問題を「他人事」だと考えているように見える。京都大学の教職員ですら、これを自らの責任と認識し得ている者はごく僅かである。「上」から設定される「コンプライアンス」や「研究倫理」に対しては敏感に対応し、相互監視体制が急速に構築されていくのに対し、日本で周辺化されてきた人々からの訴えは「クレーム」対応で冷淡にあしらうような大学は、学知の公共性を自ら掘り崩すことになるだろう。収蔵庫に閉じ込められた遺骨は、大学の内側から、ひっそりと今日の学問への異議申し立てをし続けている。

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 32 第3部
ハプリの世界 第9章 動物供儀と部落共同体 川元祥一

部落解放 775 (解放出版社刊, 2019. 7) : 600円

特集 スポーツと人権

本の紹介

康潤伊・鈴木宏子・丹野清人編著 『わたしもじだいのいちぶですー川崎桜本・ハルモニたちがつづった生活史』

菅原智恵美/朝治武・谷元昭信・寺木伸明・友永健三編著『部落解放論の最前線ー多角的視点からの展開』

炭谷茂

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 33 第3部
ハプリの世界 第10章 「昭和」の殺牛馬雨乞 川元祥一

部落解放研究 210 (部落解放・人権研究所刊, 2019. 3) :
2,000円

特集 1 宗門改帳研究会の研究成果

大阪府富田林市・富田地区の歴史概観 田村賢一/江戸中後期における河内国石川郡新堂村領富田村の人口変動とその背景 寺木伸明/河内国石川郡新堂村領富田村の人びとの通婚圏についてー一七一七年から一八一五年までー 藤原有和

特集 2 朝鮮衡平運動史の研究 2

一九二五年の體泉事件と社会主義運動勢力の認識 チェボミン(翻訳:高正子)/衡平運動家の人物像ー「衡平青年前衛同盟事件」史料から見えるもの 吉田文茂

国際社会で承認のロマ民族史の転覆を謀る「ジプシー研究」ー水谷駿著『ジプシー史再考』(柘植書房新社、二〇一八年)を読む 金子マーティン

文化期における悲田院仲間の人口構造ー『文化九年 悲田院仲間宗旨御改帳控』の分析から 小野田一幸

長宗我部・山内時代の土佐国坂折村についての一考察 宇賀平

書評 『太鼓の履歴書・洞内銘文報告』(服部英雄編著) 藤井寿一

部落問題研究 228 (部落問題研究所刊, 2019. 3) : 1,058円

キー・コンピテンシー再定義と新旧学習指導要領 八木英二
書評 三田智子著『近世身分社会の村落構造ー泉州南王子村を中心にー』

畿内の太閤検地とかわた村ー三田智子著『近世身分社会の村落構造』を読んで 牧原成征/三田智子著『近世身分社会の村落構造』に学ぶー村落論の立場からー 町田哲/書評: 三田智子著『近世身分社会の村落構造』ー身分社会論の立場から、英語圏の研究をふまえて マーレン・エーラス/泉州南王子村研究の進展のためにー書評へのリプライにかえてー 三田智子

史料紹介 近世隠岐島流人の科口書(下、その1) 松尾寿
むこうにみえるは ウェーブ21通信 (人権ネットワーク・ウェーブ21刊, 2019. 3)

「特措法」制定から50年を迎えて 1 山田康夫

武内了温の願い—真宗同和問題研究集会での発言について— 雨森慶為

「武内了温筆墨書」にみる解放運動の原点 中山量純
祖父の足跡をたどって—硫黄島の遺骨収容状況から考える「戦後」— 近藤恵美子

水平社博物館研究紀要 21 (水平社博物館刊, 2019.3) : 1,000円

水平社博物館開館20周年記念国際シンポジウム「水平社創立の思想を世界へ」

人権博物館の国際発信—「世界の記憶」登録の意義 栗原祐司/全国水平社創立の世界史的意義 朝治武/京城(キョンソン)地方法院資料の現況と活用 韓亘熙/水平社と朝鮮衡平運動—交流・連帯の歴史とその問題点— 水野直樹/パネル討論

であい 684 (全国人権教育研究協議会刊, 2019.3) : 160円
人権文化を拓く 256 ドキュメンタリー映画「アイたちの学校」を制作して 高賛佑

であい 685 (全国人権教育研究協議会刊, 2019.4) : 160円
トイレと自由と人権と 片岡亮太

であい 686 (全国人権教育研究協議会刊, 2019.5) : 160円
歴史を歩く 「福田村事件」の現地を訪ねる 佐佐木寛治
人権文化を拓く 258 生き甲斐も、死に甲斐もある都市に—お寺の社会活動最前線— 秋田光彦

同和教育論究 40 (同和教育振興会刊, 2019.3) : 1,500円
宗教的視点から見た個人情報 藤本文隆

観経施陀羅考 直海玄哲

史料紹介 近世真宗差別問題史料 12—「諸事取調言上帳」(その1 富島帯刀・秋田勝重担当) — 左右田昌幸
『同和教育論究』総目次

[奈良県立同和問題関係史料センター]研究紀要 23 (奈良県教育委員会刊, 2019.3)

幕末期、在地神職の離壇運動と宮郷—大和国式下郡蔵堂村森屋社をめぐって— 清水有紀

中世大和の非人施行に関する一考察 山村雅史

明治期、被差別部落出身知識人の社会的・文化的基盤—中尾靖軒をめぐって— 奥本武裕

研究ノート・中世興福寺の日記にみる風呂 竹田祥子

ヒューマンJournal 228 (自由同和会中央本部刊, 2019.3) : 500円

部落解放運動40年を振り返って 31 部落解放に反天皇制は無用 11 灘本昌久

ヒューマンライツ 373 (部落解放・人権研究所刊, 2019.4) : 500円

特集 広がる差別解消の条例

東京都人権条例の意義と課題—ヘイトスピーチ解消の観点から 師岡康子/「国立市人権・平和基本条例」の成立と今後の課題 押田五郎/あらゆる差別の解消をめざして—土佐市人権尊重のまちづくり条例の成立 岡本雅道

ヒューマンライツ 374 (部落解放・人権研究所刊, 2019.5) : 500円

特集 女性の排除—医学部入試差別から考える

連載 貧困・子ども・人権 21 子どもの貧困、虐待への

取り組み—特定非営利活動法人「あわじ寺子屋」三年間の実績報告(後編) 大賀喜子

ヒューマンライツ 375 (部落解放・人権研究所刊, 2019.6) : 500円

特集 地域共生社会と隣保館・地域住民の課題

私の沖縄問題 12 「牢屋」が語る沖縄の過去・現在・未来 高橋年男

ひょうご部落解放 170 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2018.9) : 700円

特集 部落の若者と解放運動

部落解放同盟兵庫県連合会青年部座談会 青年と部落—次世代につなげる思い 辻川智徳, 佐々木大介, 大杉静, 西本繭, 石元清英

戦後期兵庫部落解放運動史ノート 小西弥一郎を中心に(前編) 高木伸夫

本の紹介

波田野真帆, 照山絢子, 松波めぐみ編『障害のある先生たち「障害」と「教員」が交錯する場所で』 荒西正和/飛田雄一著『心に刻み 石に刻む 在日コリアンと私』 永田恵

佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 47 (佛教大学大学院刊, 2019.3)

神輿場はなぜ荒れたのか—柳田國男『祭礼と世間』から考える— 中西仁

部落解放 773 (解放出版社刊, 2019.5) : 600円

特集 「道徳科」の授業と学級づくり

ヘイト・スピーチを受けない権利 47 部落解放論の拡大と深化 前田朗

本の紹介

松島泰勝『琉球 奪われた骨—遺骨に刻まれた植民地主義』 川瀬俊治/アジア・太平洋人権情報センター編『人権ってなんだろう?』 梁英子

「同和地区の貧しさ」について考える 4 同和地区における「人びとの移動」と階層変動 2 島和博

部落共同体論 形成期の社会的分業とその構造 31 第3部 ハプリの世界 第8章 ハプリの民として 川元祥一

部落解放 774 (解放出版社刊, 2019.6) : 600円

特集 性暴力と闘う女たち

本の紹介

金明秀『レイシャルハラスメントQ&A—職場、学校での人種・民族的嫌がらせを防止する』 佐藤裕/北海道新聞社編『こころ揺らす—自らのアイヌと出会い、生きていく』 木内朝進

夜間中学のこれから 『生きる 闘う 学ぶ—関西夜間中学運動50年』出版、教育機会確保法施行をふまえて 白井善吾

知ること、そして出会うこと トランスジェンダーであり、被差別部落出身の立場から 田中一步

太鼓の胴から見える部落史 服部英雄編著 地域資料叢書 16『太鼓の履歴書・胴内銘文報告』 太田恭治

「同和地区の貧しさ」について考える 5 同和地区における「人びとの移動」と階層変動 3 島和博

難民問題への本学の取り組み—2018年度— 打樋啓史
 キャンパスにおける多様性尊重にむけてのソーシャルア
 クション：第6回関学レインボーウィークを振り返って
 武田丈

外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援活動に参加
 する学生の意識と実態 細見和志, 辻本久夫

「関係概念」が描く世界～差別意識と《境界》～一日野
 謙一講和録 3— 日野謙一

関西大学人権問題研究室紀要 77 (関西大学人権問題
 研究室刊, 2019. 3)

「異文化理解」と「視点を変える力」の育成—ドイツの
 「歴史」教科書にみられる図像資料から考える— 杉谷
 眞佐子

エンパス尺度の作成—高い感性をもつ人の理解— 串
 崎真志

資料 インド障害法の変容 浅野宜之

大阪府高槻市富田地区における包摂型のまちづくり—子
 ども食堂をはじめとする子どもの居場所づくり事業を中
 心に— 岡本工介

大学教育とジェンダー—2017年関西大学学生の意識調査
 — 関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班

京都市地域・多文化交流ネットワークサロン通信 29
 (京都市地域・多文化交流ネットワークサロン刊, 2019. 3)

崇仁の歴史(後編) 前川修

グローブ 97 (世界人権問題研究センター刊, 2019. 4)

奈良と京都 松井庄五郎の人脈 井岡康時

留岡幸助日記の再検討から、包摂と排除を行う統治テク
 ノロジーとしての部落改善・融和政策の意味を明らかに
 する 野口道彦

国際人権ひろば 145 (アジア・太平洋人権情報センター
 刊, 2019. 5) : 350円

特集 子どもの権利条約からみる日本の子どものいま

佐賀部落解放研究所紀要 36 (佐賀部落解放研究所刊,
 2019. 3)

部落問題を通して、人間・社会<差別>を再考する—二
 人称の関係・つながりを求めて— 原口孝博

村民生活の数値化—1795～1836年の大和国吉野郡田原村
 — 木下光生

差別を「禁止」する三つの法律と一つの「指針」～障害
 者・ヘイトスピーチ・被差別部落・セクシュアルマイノ
 リティ～ 阿南重幸

寺請け制と宗門改め 信教の自由と身分差別を問う 森知見
 紹介 朝治武『水平社論争の群像』 竹森健二郎

人権教育研究 27 (花園大学人権教育研究センター刊,
 2019. 3)

黒塗り教科書の一例：『中等文法二』の場合 菅修一

在宅介護者における衝動行為に対する専門職の予測と介
 入—その困難さと必要性— 根本治子

呉秀三・私宅監置の社会調査100年の総括に関する研究
 ノート—精神障害者福祉政策を念頭に— 藤井涉

精神病早期介入サービスは日本の若者に最善の利益をも
 たらすか 三品桂子

ヘイト・スピーチの社会心理学 八木晃介

人権教育研究センター報 35 (花園大学人権教育研究
 センター刊, 2019. 4)

寺院と被差別民 森本泰弘

座談会 宗門立大学と部落差別 小林圓照, 西村恵信, 八
 木晃介, 吉永純, 森本泰弘, 首藤晶子

人権と部落問題 922 (部落問題研究所刊, 2019. 4) : 600円
 特集 子どもと教職員の人権と教育

本棚 東上高志著『部落問題解決過程の証言—研究所の7
 0年を中心に—』 大塚茂樹

ごった煮人生をふり返って 12 アジア太平洋戦争期のわ
 が家の生活 成澤榮壽

人権と部落問題 923 (部落問題研究所刊, 2019. 5) : 600円
 特集 あきらめない沖縄

井ヶ田良治先生を悼む 木戸季市

文芸の散歩道 100年前の大阪自彊館—山田清三郎『地上
 に待つもの』に描かれた— 秦重雄

ごった煮人生をふり返って 13 アジア太平洋戦争から敗
 戦後へ 成澤榮壽

人権と部落問題 924 (部落問題研究所刊, 2019. 6) : 600円
 特集 外国人労働者の人権

文芸の散歩道 反戦小説『二十四の瞳』 福地秀雄
 本棚

成澤榮壽著『小泉八雲のヒューマニズム精神とその変容
 —部落問題記述を中心に—』 桑原律／塚田孝著『大坂
 の非人—乞食・四天王寺・転びキリシタン』『大坂民衆
 の近世史—老いと病・生業・下層社会』 森下徹

ごった煮人生をふり返って 14 戦後部落解放運動の発足
 と長野県 成澤榮壽

じんけん ぶんか まちづくり 63 (とよなか人権文化
 まちづくり協会刊, 2019. 4)

歴史を歩く「福田村事件」の現地を訪ねる 佐佐木寛治

振興会通信 145 (同和教育振興会刊, 2019. 3)

「経典から学ぶ差別の現実について」—その経緯とねら
 い 2 小笠原正仁

同朋運動史の窓 51 左右田昌幸

振興会通信 146 (同和教育振興会刊, 2019. 5)

「経典から学ぶ差別の現実について」—その経緯とねら
 い 3 小笠原正仁

同朋運動史の窓 52 左右田昌幸

身同 解放運動推進本部紀要 38 (真宗大谷派宗務所
 刊, 2019. 3) : 1, 200円

天皇代替わりと象徴天皇制 横田耕一

ハンセン病家族訴訟の意義と今後の課題 徳田靖之
 女性差別について考える 伝統と差別 福島榮寿・見義悦
 子・本多祐徳・山内小夜子

兵戈無用—正義と正義の対立を超えて— 梶原敬一・平
 塚淳次郎・栗原俊雄・近藤恵美子

アイヌ・ネノ・アン・アイヌ—北海道開拓・開教の歴史か
 ら問われること— 竹内渉・結城幸司・訓覇浩・箕輪秀一

「差別」と「出遇い」 岡本大志

差別問題からはじまる私の学び 伊藤聡

収集逐次刊行物目次 (2019年4月～6月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

愛生 818 (長島愛生園長講会刊, 2019. 4)

神谷書庫特集

母が読んでいた本 神谷律／神谷美恵子の蔵書 神谷永子／神谷書庫での出逢いと学び 田中真美／神谷美恵子展の思い出 柴八千穂／「生きがいについて」を読んで 稲川大介

明日を拓く 119 (東日本部落解放研究所刊, 2019. 3) : 1,080円

特集 「人間を冒瀆してはならない」—差別を禁止する法の可能性について

インド・アグラの靴・履物業とチャマル 友常勉

アフーマティブやまぐち21 10号 (アフーマティブやまぐち21刊行委員会, 山口県人権啓発センター刊, 2019. 4) : 800円

ヘイトスピーチ解消法と山口における課題 櫻庭総

沖縄におけるハンセン病政策の矛盾と現実 山田富秋

高須久子の出獄 布引敏雄

大日本同胞融和会と明治三六年の山口県の部落 高林公男
歴史の窓 赤松照幢 伊勢本健

「寝た子」はネットで起こされる!?～ネット社会と部落差別の現実～ 川口泰司

解放新聞 2901 (解放新聞社刊, 2019. 4. 1) : 90円

「部落の地名」リスト拡散の差別性と危険性 阿久澤麻理子

解放新聞 2902 (解放新聞社刊, 2019. 4. 8) : 90円

本の紹介 朝治武・谷元昭信・寺木伸明・友永健三編著
『部落解放論の最前線 多角的な視点からの展開』 和田献一

解放新聞 2903 (解放新聞社刊, 2019. 4. 15) : 90円

本の紹介 吉本洋一著『人権 わがまちの履歴書 部落解放運動編』

解放新聞 2906 (解放新聞社刊, 2019. 5. 13) : 90円

大阪・和泉地区識字学級訪問調査

解放新聞 2907 (解放新聞社刊, 2019. 5. 20) : 90円

本の紹介 『生きる 闘う 学ぶ 関西夜間中学運動50年』

解放新聞 2911 (解放新聞社刊, 2019. 6. 17) : 90円

全国部落史研究会が長谷川発言に見解を公表

解放新聞 2912 (解放新聞社刊, 2019. 6. 24) : 90円

差別法としての「優生保護法」 藤野豊

解放新聞東京版 956 (解放新聞社東京支局刊, 2019. 5. 15) : 93円

本紹介 中山武敏著『人間に光あれ』 高岩昌興

学叢 41 (京都国立博物館刊, 2019. 5)

近世祇園社境内における「新地」成立過程の研究 下坂守

語る・かたる・トーク 290 (横浜国際人権センター刊, 2019. 4) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う

「人を想う」とは 吉成タダシ

語る・かたる・トーク 291 (横浜国際人権センター刊, 2019. 5) : 550円

語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う

「資料はすでに生徒の中にある」 吉成タダシ

かわとはきもの 187 (東京都立皮革技術センター台東支部刊, 2019. 3)

靴の歴史散歩 132 稲川實

皮革関連統計資料

KG人権ブックレット 25 (関西学院大学人権教育研究室刊, 2019. 3)

なぜ性の用語はだいたい横文字なのか～LGBTとかセクシュアルマイノリティとか 牧村朝子

部落問題とは何か—住吉地区の取り組みから見えてきたこと 友永健吾

終わっていない原発避難 松田曜子, 森松明希子

関西学院大学人権研究 23 (関西学院大学人権教育研究所刊, 2019. 3)

トリーアのユダヤ人記念碑 河村克俊

数字から見た芦屋市の外国人住民の動向 (グローバル化)

辻本久夫

「『ブラック企業』の実態と働く者の人権」開催報告

阿部潔

事務局よりお知らせ

◇横井清さんには京都部落史研究所発足時より企画委員、研究員として『京都の部落史』編さん事業を支えていただきました。ありがとうございます。心よりご冥福をお祈りいたします。

◇差別の歴史を考える連続講座の第1回・2回が無事に終了いたしました。後半は10月から11月にかけて4回開催いたします。ふるってご参加ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分